

アンドレ・ブルトンの『ナジャ』における
都市と小説の関係

－ 異文化理解の一つの試みとしてジェイムス・ジョイスの
『ユリシーズ』を視野に捉える －

加 藤 彰 彦

四天王寺大学紀要
大 学 院 第16号
人文社会学部・教育学部・経営学部 第55号 2013年3月
短期大学部 第63号
(抜刷)

アンドレ・ブルトンの『ナジャ』における都市と小説の関係 —異文化理解の一つの試みとしてジェイムス・ジョイスの『ユリシーズ』 を視野に捉える—

加 藤 彰 彦

【要旨】

アンドレ・ブルトンの『ナジャ』の読解においては、ジャック・ラカンの言う対象 a を求める過程であるとするのが可能であるが、その場合対象 a をナジャとして捉え、『ナジャ』をブルトンの自己同一性の探求と考えるのではなく、対象 a をブルトンが存在した現実の街であるパリと捉え、パリという街の中をさまよう様がまさに対象 a を探し求める過程であると解することができる。このような視点は、異文化理解の一つの試みとして捉えたジェイムス・ジョイスの『ユリシーズ』読解において、ダブリンという街を主人公がさまよう様を、日常生活の観点から様々な動詞を抽出し分析したデ克蘭・カイバードの『ユリシーズと我々』から示唆を得たものである。ただこの論考における視点はカイバードが示した日常生活におけるものではなく、サルトルの『存在と無』において示されている存在論的観点、認識論的観点、実践論的観点に拠るものとした。またナジャという女性の存在は、自己同一性を成立させる対象ではなく、『ユリシーズ』におけるノラ・バーナクルのように主人公に靈感を与え作品を成立せしめる存在として解することができる。

【キーワード】アンドレ・ブルトン、『ナジャ』、ジェイムス・ジョイス、『ユリシーズ』

序章

1953年に刊行されたアンドレ・ブルトンの『吃水部におけるシュルレアリスム』は『シュルレアリスム宣言』に始まるブルトンの一連の宣言の最後に位置するものとして、宣言と銘打たれているわけではないが、実質的には『第四宣言』として捉えられるものである。ここにおいてブルトンはシュルレアリスムの活動が言語を出発点として開始されたものであるということをはっきりと示しながら、同時期に存在した文学上の単なる言葉遊び、その中にジェイムス・ジョイスがいるわけであるが、それとの根本的相違点を明確にしている。このあたりの認識はまず前提として共有しておこう。ブルトンは次のような考えを示しているのだ。「言語の過小評価に対して峻厳な方法で抵抗することのこの必要性は、ここではロートレアモン、ランボー、マラルメとともに際立ってきたし——同時にイギリスにおいてはルイス・キャロルとともにであるが——、その時からあがらいがたく明らかにされざるを得なかった。証拠としては、関心があり均等なものではないのだが、〈音声学的カバラ〉や〈鳥の言語〉とどうにかこうにか結びつい

ている〈言葉遊び〉の活動の繁栄(ジャン・ピエール・ブリッセ、レイモン・ルーセル、マルセル・デュシャン、ロベール・デスノス)と、〈レトリズム〉に到達することができたと言えなくもない〈言葉の革命〉の爆発(ジェイムス・ジョイス、E. E. カミングス、アンリ・ミショー)を通過して、未来派の〈自由な言葉〉や、〈ダダ〉の非常に相対的な自発性に相通じる試みがある。」(PIV pp.19-20)¹⁾

ところがこのような言葉の革命がシュルレアリスムと同列で論じられることになるかという点と、そうではないのだ。ブルトンは続けて次のような考えを示している。「それらの試みは全般的に価値が下落した言語の圧制に対する反抗という共通した意志を表わしているにも拘らず、シュルレアリスムの起源における〈自動記述〉とジョイスの体系における〈内的独白〉とが保証している試みとしてのやり方は根本的に本質が異なっている、別の言い方をすれば何から何まで異なった世界理解の二つの様式が根底にあるということである。」(PIV p.20)

ここにおいて指摘されているジョイスの「内的独白」によって書かれた作品とは『ユリシーズ』に他ならない。まず年代的なことから明らかにしておくと、ブルトン自身によって明らかにされた自動記述に関しては、1924年刊行の『シュルレアリスム宣言』において自動記述がシュルレアリスムであるとする定義が示され、またその実証として『宣言』の巻末には自動記述のテキストとして『溶ける魚』が添えられている。またジョイスの『ユリシーズ』が刊行されたのは1922年である。ここにおいて影響関係を見て取ることも不可能ではないであろうが、それは我々の論考の目的ではなく、むしろ我々が注目したいのはその言語上の技法の問題ではなく、一つの都市と一つの小説がテキスト上において成立させている関係なのである。ジョイスの『ユリシーズ』は1904年6月16日のダブリンを舞台にそこで生活する人々と主人公レオポルド・ブレードムとの出会いと会話を描いたものであり、一方ブルトンの『ナジャ』は1926年の10月6日から12日までのパリを舞台にしたブルトンとナジャの出会いと会話を描いたものであるとすることができる。

ブルトンの『ナジャ』の分析にあたっては、テキストの本体が「私とは誰であるか。」(PI p.647)という問いかけで始まることから、ナジャとの関わりにおいて探究される自己同一性の物語として捉えることも可能だろう。ただ我々がそのような分析をするに際してどうしても引っかかってくるのが、ナジャの物語がとりあえず終わり、ブルトンが思索的な記述を展開するに当たって「ある街の外観」(PI p.749)を問題にすることなのである。そのような視点から改めてテキストを見直してみるならば、『ナジャ』で描かれているものはナジャと同じくらい、場合によってはそれ以上にパリという街であり、我々はそれを無視することができないと判断するに至ったのである。そしてそのような分析の可能性を示唆してくれるものとして、デクラン・カイバードの『ユリシーズ』研究書である『〈ユリシーズ〉と我々』を挙げることができる²⁾。カイバードは『ユリシーズ』の全18章を「目覚める」「歩く」「食べる」「夢見る」などといった人間の日常の主として身体的な行為という観点から読み解いているわけであり、我々が方法論として学んだのはこの点にある。もっとも我々が論文の展開において取り入れたのは論文構成上のことであり、むしろ我々が注目したのは都市と小説の関係という前提にある。ジョイスの『ユリシーズ』がホメロスの『オデュッセイア』を下敷きにしたように、そこで示されているもの

は世界における主人公の彷徨である。ジョイスが『ユリシーズ』を書き終えるにあたって最後に「トリエステーチュリーッヒーパリ、1914-1921年」(UL p.933)と書き記しているのも作者自身の彷徨を物語ってもいるのだろう。そしてこれをブルトンの『ナジャ』に置き換えて考えてみるならば、ブルトンのパリにおけるあるいはパリを越えての彷徨と読み取ることも可能ではないかというのが我々のこの論考の出発点となっている。

もっとも我々の『ナジャ』読解の基本的姿勢はこれまでの論考において示しているように、ラカンの言う対象aの探究ということで理解されるべきものだというのである。つまりナジャの出現以前の段階においてブルトン自身によって「私とは誰であるか。」(PI p.647)という問いかけが為され、また「他の全ての人たちの中において私はこの世において何をしにやってきたのかそして私自身でしかその運命に応えることができないためのいかなる唯一の伝言を私はもたらすことになるのか」(PI p.648)という問題提示があった上でナジャと出会っているにも拘らず、結果的にはナジャを見失うという事態に至っているわけであり、これはラカンが『セミネールXX』において書いているように、「対象aはいかなる存在でもない。対象aは、要求が空虚さでもって仮定しているものであり、換喩によって、つまり文の最初から最後まで保証された純粋な継続性によって要求を位置付けるべきでしかなく、それがいかなる存在も引き受けることのない欲望から存在し得ていることを我々は想像することができるのである。(中略)

〈私が君に提供したものを拒否することを私は君に要求する〉というこの文を言い表わすことで、私は私が最後に付け加えたこの〈そうじゃない〉によってしかその理由を述べるができなかったのだ。〈そうじゃない〉が意味するのは、全ての要求の欲望において、対象a、喜びを満足させにやってくるであろう対象の願いしかないということである」(SXX p.114)ということから、ナジャを対象aと捉えるか、対象aの位置にあったと理解するのが妥当だと思われるということである。

ならばこの論考において我々が探究すべきものは何か。我々がこの論考において明らかにしたいのは、対象aを求める過程において、何が為されているのかということである。つまり我々はこの日常生活を送る上で何が対象aを求める行為となるのかということなのである。ここにおいて既に指摘したカイバードの著作の副題に注目する必要があるだろう。それは「日常生活の技法」であって、具体的に何をするかということが問題になってくる。もちろんここにおいていかに生きるべきかという視点は存在しない。具体的な行為は、それが行なわれる生活空間つまり主人公が生活している都市空間との関わりを明らかにしていくのである。『ユリシーズ』はその内的独白という技法が注目されがちであるが、都市における様々な人々との出会いが数多く記述されている。特に街頭における思いもよらない人々との出会いであって、この点についてはさすが『ナジャ』のしかるべき箇所が指摘できる程である。カイバードによって示される様々な身体的行為について何らかの理論的根拠を見出せなかったこともあり、我々は行為に注目して論考を進めるという方法は援用しながらも、その項目自体は踏襲しなかった。むしろ我々が直接論考の中で具体的に論究していくのではないが、常に念頭に置き展開上参考にしたのは、カントの『純粋理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』であり、サルトルの『存在と無』である。

つまり我々はカイバードの日常生活における身体的行為を観点として論考を進めていくという方法を援用しながらも、テキストに見られるそのような行為を取り上げてそれぞれの項目として論じていくというのではなく、ある種の理論的根拠なり理論上の展開、流れを必要とすると考えたのである。それは結局のところ対象 *a* を探し求めるという方向が既に明らかになっているからであり、その方向に向かうべき段階があるはずだと考えたからに他ならない。そして我々がこの論考において援用したものは、存在論、認識論、実践論という三つの考え方であり、それらによる三部構成を取りながら、『ナジャ』のテキストにおいて示されている動詞に着目して章分けをして分析することにした。

第一部 存在論的観点

第一章 「である、いる」 *être*

サルトルは『存在と無』においてその「現象学的存在論の試み」を始めるにあたって次のように書いている。「我々は唯一の振舞いの研究に限定することはないだろう。我々は逆に、〈人間-世界〉の関係の深い意味に至るまで、振舞いから振舞いへと、いくつかのものを叙述し洞察しようとするだろう。しかし何よりもまず我々の研究において導きの糸となる役目を果たし得る根本の振舞いを選ぶことが適当である。」(EN p.38)

このような展望に立ちながら、我々はまず「である、いる」*être* を選ぶ。それは既に指摘したように『ナジャ』の本体が、つまり「序言」を除いてみるならば、まさに「私とは誰であるか。」(PI p.647)という問いかけで始まるからである。ブルトンはこれを解明するためにある諺を引き合いに出すのであるが、それは「君が誰とつきあっているか私に言い給えそうすれば私は君に君が誰であるか言おう」(PI p.1523)というものである。ブルトンはこの「つきあう」という言葉に着目し、次のように説明している。「明らかにそれは私が誰か(下線原文)であるために、私が存在することをやめなければならなかったものをほめめかすのである。」(PI p.647)

この点については、サルトルが『存在と無』において「人が人であるところのものである(下線原文)」(EN p.98)という表現を使いながら、それを次のように説明している。「このカフェのボーイを注視してみよう。彼は生き生きとしてしっかりと、少し正確すぎて、少し素早すぎる身振りをしている、彼は少し生き生きしすぎる歩みでお客たちの方にやってくる、彼は少し熱心すぎるくらいにお辞儀をする、彼の声、彼の眼はお客の注文に対して少し配慮で一杯になりすぎた関心を表現している、最後に彼のやり方において何というか自動人形的な不屈の厳密さを模倣しようとし、綱渡り芸人の一種の無鉄砲さでもってお盆を持ち、彼が腕と手の軽い動きで絶えず回復している、絶えず不安定で絶えず断たれた均衡においてお盆を支えながら、彼は再び現われるのである。彼の振舞いの全ては我々には演技のように見える。彼はあたかも互いに要求しあっている機械仕掛けであるかのように彼の動きを従わせることに専念し、彼の身振りや彼の声さえも機械仕掛けのように思われる。つまり彼は物事の苛酷なまでに厳しい素早さと迅速さを手に入れているのである。彼は演じ楽しんでいる。しかしだからといって彼は何を演じているのか。それがわかるためには長く彼を観察する必要はない。つまり彼はカフェのボーイであることを(下線原文)演じているのである。」(EN pp.98-99)

この論法で行くならば、ブルトンはブルトンであることを演じているということになるのであり、その場合述語の部分にあたるブルトンとはいわゆるシュルレアリスム運動の主催者としてのブルトンであると言えることができるだろう。しかしそのブルトンになるためにはどのような過程を経なければならないのか、再度テキストに戻って検討を続けることにしよう。10月4日にブルトンはナジャと初めて出会うのであるが、この時ナジャはブルトンに「私が誰であるかを(これらの言葉の非常に限定された意味で)」(PI p.686)聞こうとする。このあたりだと見知らぬ人への問いかけとして理解できるのであるが、10月6日においてはナジャはブルトンに対してマリー・アントワネットの時代において「であんた、その時、あんたは誰であったの。」(PI p.697)という問いかけをしているのだ。このような問いかけはブルトンからナジャに対してもあって、その意味では相互に行なわれていたことになるのであるが、例えば10月4日において次のような箇所がある。「まさに立ち去るところで、私は他の全ての問いを要約する問い、恐らく、それをするためには私しかないが、しかし、少なくとも一度は、それに値する答えを見出した一つの問いを彼女に提示したいと思う、つまり〈あなたは誰であるか〉。そして彼女は、ためらいもなく、〈私はさまよえる魂であるのです〉。」(PI p.688)

このような問いかけは出会った当初だけではなく、この後にも存在するのであって、ブルトンは「誰が本当のナジャであるのか」(PI p.716)と自問することになるのである。確かに「私は、最初の日から最後の日まで、ナジャを自由な精霊とみなした」(PI p.714)とブルトンは書いているし、「彼女は、語の真の意味において私を一個の神とみなし、私が太陽であった(下線原文)と信じるのがあったということを私は知っている。」(PI p.714)という表現もある。ところが一方で、「現実、私は今や知っているが狡猾な犬のように、ナジャの足もとに横になったこの現実の前で、私たちは誰であったのか」(PI p.714)という問いかけも同時に存在するのだ。ブルトンが『ナジャ』の冒頭において提示した論法に従うならば、ブルトンが誰であることを明らかにするためには、ナジャが誰であることを明らかにすればいいということになる。ところがそのナジャが誰であるかがわからないということなのである。確かにサルトルが「我々が存在するところのもの」(EN p.98)という表現を使う場合、ただ単に存在しているだけでは充分ではないという予測は立てることができる。サルトルは先に示したカフェのボーイの例の後に、次のような説明を加えている。「しかしそれはつまり、同時に、内側から見ればカフェのボーイは、このインク壺がインク壺であり(下線原文)、コップがコップであるという意味で、ただちにカフェのボーイであり得ないということである。」(EN p.99)

つまりここにおいて他者との関わり方といったものが問題になってくると理解されるのであるが、それにしたところでナジャとの関係で即時にブルトン自身が明らかになるというものでもない。恐らくはどのようなことを思えばかつどのようなことをしたかといった様々な行為が問題にされなければならないわけである。このように理解するならば、ブルトンが『ナジャ』において、ナジャの物語を始める前段階でユイスマンスに言及し、事実や経験の重要性を指摘しているのも当然のことなのである。つまりブルトンは次のように書いているのだ。「私はといえば、私は私のガラスの家に住み続けるだろう、そこでは人はいつでも誰が私を訪ねて来ているか見ることが出来るし、天井や壁につるしてあるもの全ては魔法によるかのようにしっかり

と固定していて、私は夜ガラスのベッドでガラスのシーツに包まれて休み、私である誰かが(下線原文)遅かれ早かれダイヤモンドに刻まれて私に見えてくるだろう。」(PI p.651)

つまり「人が人であるところのものである」と言う時、そこに介在するものは、我々を取り巻く様々な事物であり現象であり、また我々はそれらに対してどのように感じどのように考えたかということであり、それらによって我々は構成されて存在することができるということであり、たとえわずかな物事であっても、本来のものとは違ったものが提示されるならば、そこにあるものは本来の我々とは違ったものになるということである。従って我々は「である、いる」être という動詞から出発して、次の動詞へと移っていかなければならないのである。

第二章 「住む」habiter

存在するということになるといささか抽象概念のようになってしまいが、これをもう少し日常生活に根差したものとして捉えるなら「住む」habiter という動詞に出会うことになる。既に指摘したように、ブルトンは「私はといえば、私は私のガラスの家に住み続けるだろう」(PI p.651)と書いているが、それ以外の箇所について見ると「住む」という動詞はブルトンにとっての活動の拠点であり、出発点もしくは中継地点と深く結びついている。ブルトンは『ナジャ』においてナジャの物語を始める前に、シュルレアリスムのとも言うべき数々の体験を記しているのだが、その書き出しが次のようなものである。「私は出発点として、私が 1918 年頃住んでいた、パンテオン広場の、偉人ホテルを、そして休憩地としてヴァランジュヴィル-シュル-メールのアンゴの館をとろう」(PI p.653)。

この偉人ホテルというのはブルトンがフィリップ・スーポーと自動記述を行なった場所であり、またアンゴの館は『ナジャ』を書くための場所として設定されたものである。ここにおいて注目すべきは、シュルレアリスムの活動を時間的に捉えて発展の経過を記すだけではなく、空間的につまり住んでいる場所や街と結びつけている点なのである。このような記述は 10 月 6 日にブルトンとナジャが出会っている時にも見られるのであって、二人はたまたま夕食をとることになって間違っただフィーヌ広場に来てしまったことがあった。その時の経緯を記すとともに、このドフィーヌ広場についての言及があるのだ。「このドフィーヌ広場は確かに私の知る限り最も深く人里離れた場所の一つ、パリにある最悪の空地の一つである。私がそこに行く度に、私は他の所に行きたいという気持ちが少しずつ私から離れていくのを感じたし、非常に甘美で、あまりにも心地よく執拗で、そして要するに人を駄目にするような重圧から自由になるためには私自身と議論しなければならなかったのである。その上、私はこの広場の近くにあるホテルである〈シティ・ホテル〉にしばらくの間住んでいたことがあり、いつでも往来は、あまりにも簡単な解決に満足しない人たちにとって、怪しいものである。」(PI p.695)

マルグリット・ボネの研究によると(PI p.1545)、この〈シティ・ホテル〉の当時の住所も明らかとなっているのであるが、その典拠となったのが 1923 年版の「フランスホテル年鑑」であって、このことはブルトン自身がこのホテルに住んでいたのもこの時期であるということになるのであろうか。少なくとも 1918 年以前ではないように思われ、従ってこの〈シティ・ホテル〉というのは先に示されている出発点と中継地点に関する記述からすると、途中の段階にあると

見ていいだろう。またこれ以外の場所も当然あるわけであり、この住んでいる場所の変遷は単なる移動に留まらない性格を持っている。というのもブルトンは『ナジャ』において、ナジャの物語が終わった後「ある街の外観」について思考を巡らすからである。そもそもブルトンはナジャの物語が終わった後、「私はこの物語が導くことになる場所のいくつかを見直すことから始めた。」(PI p.746)

この見直しの過程において、ブルトンはそれぞれの場所において様々な思いを巡らせるわけであるが、その中の一つに次のようなものがある。「ボンヌ-ヌヴェル大通りは、残念なことに私のパリ不在時に、いわゆる<サッコとヴァンゼッティ>の略奪の素晴らしい日々のに、私のものであった期待に応えるように思われた後、私が混乱に関して探し求めているそして目標を人に知られずに私に提供されていると私がかたくなに信じている大いなる戦術上の拠点の一つとして本当に指名されているのだが」(PI p.748)。

つまりブルトンにとって街とは何かと結びつけて捉えられるものなのである。さて「住む」ということについてなのであるが、ブルトンが実際に住んでいる街を越えて更に広がりを持つ空間が考えられているように思われる。それは「ある街の外観」について次のように書かれているからである。「ある街の外観」がどうなるか、空気が生命のために存在しているとみなされているように私の思考のために存在しているようなある要素の力によって私が住んでいる街から取り去られ抽象された真の街についてさえどうなるか沈黙考することになるのは私ではない。何の未練もなく、この時私は街が別のものになり逃走するのさえ見ている。(中略)私はこの心的風景を下書きの状態にしておくのだ」(PI p.749)。

この後ブルトンはアヴィニョンについて言及し始めるのであるが、これは当時ブルトンが愛人であったシュザンヌ・ミュザールと一緒に南仏に行っていて、当然アヴィニョンにも滞在したことが背景にある。ならばブルトンにとって街とは、女性との結び付きで捉えることができるかもしれないという可能性は出てくる。実際住んでいる場所で女性との関わりがあったことも推測されるだろう。例えば既に指摘したアンゴの館に関しても、マルグリット・ボネの研究によるならば(PI p.1506)、そこでシュザンヌ・ミュザールと後に結婚するエマニュエル・ベルルの最初の夫人と出会っていて、単に『ナジャ』の執筆だけではなかったように思われる。

第三章 「生きる」 vivre

概括的というか総括的な印象を与える「生きる」vivre という動詞であるが、これが使われているところが一箇所あり、それはこれからの論考の展開については示唆的なものである。ブルトンは『ナジャ』の執筆当時愛人であったリズ・メイエールの意地の悪さに辟易して、その破局ということもあり、失意の状態にあったのであるが、その年の11月にシュザンヌ・ミュザールと出会っていて、心境の変化を窺い知ることが出来る。その上での『ナジャ』の執筆、特に第三部があるのだ。「生きる」という動詞が使われている箇所は次のようなものである。

「中断の時期である8月末から、この物語が、今回は、精神というよりも心情に関わる感情の重みに打ちひしがれて、敏感になるがままというのは覚悟の上で私から離れていく12月末まで、この物語が守っていた最良の希望次に、信じたい人は私を信じるだろうが、まさに実現、

完全な実現、そうなのだこれらの希望の本当とも思われぬような実現で——人が生き得るように——私はどうかこうにか生きたという風に考える方がいいのだ。」(PI p.746)

つまりサルトル風に言えば、「存在はそれがあるところのものである」(EN p.33)と言う場合、その存在とは即自存在なのであって、インク壺がインク壺であり、コップがコップであるのと同様である。つまり「存在はその存在において孤立していてそしてそれはそれではないものと何の関係も維持していないということである。」(EN p.33)

存在を即自存在に限って言うなら、議論は恐らくこれ以上進まないであろう。従って、我々は即自存在から対自存在へと移行しなければならないのである。

第二部 認識論的観点

第四章 「見る」 voir

サルトルが『存在と無』において「人間の世界との関係を私に明らかにし得るある振舞いがあるか。」(EN p.38)という問いを立てる時、我々はまさに即自存在から対自存在へと移行していることになる。ここにおいて一つの手掛かりを与えてくれるのが「見る」 voir という動詞であり、例えばサルトルは次のように書いている。「私が突然発見する時、私が私の愛を見る(下線原文)時、私はそれが意識の前に(下線原文)存在していることを一挙に把握する。」(EN p.211)

見るということを強調するなら、既に出てきたインク壺も次のように表現される。「このインク壺は、テーブルの上で、一つの物(下線原文)の外観のもとにただちに私に与えられているがそれは見ることによって(下線原文)私に与えられているのである。」(EN p.379)

つまり我々と取り巻く周囲との関係を成立させる原初的とも言うべき行為は「見る」 voir ということであって、我々はまずこの動詞から見ていくことにしよう。ナジャの物語が始まる前段階のシュルレアリスムの挿話の一つとしてロベール・デスノスのことが出てくるのであるが、その中に次のような表現がある。「そしてデスノスは私に見えないものを、彼が私にそれを見せるにつれてしか私には見えないものを見続けている。」(PI p.661)

つまり世界を知るのではなく、世界を見るということなのだ。そしてこの「見る」が重要な役割を果たしていると理解されるのが、ブルトンとナジャとの関係においてなのである。10月4日にブルトンはナジャと初めて出会うことになるのであるが、その時の記述が次のようなものである。「私は、そこ、ある教会の前の、名前を忘れているか覚えていないかどちらかのこの十字路を横切ったばかりだった。突然、彼女は恐らくまだ私から十歩くらいのところにいて、反対の方向からやってきている時、私は非常にみすばらしい服を着た一人の女性を見るし、彼女もまた、私を見るか私を見たかだ。」(PI p.683)「私は今まで一度もこのような眼を見たことがなかったのだ。」(PI p.685)

ここにおいて我々は他者に向かうと同時に、他者も我々に向かうということである。ブルトンが「私とは誰であるのか」という問いかけをし、その過程においてナジャを見出したと言えるのであるが、そのことを指摘するだけでは充分ではない。そもそもナジャとは誰であるかという問いかけを繰り返さなければならないからである。従って、「人が人であるところのものである」ためには、具体的な事物や関係によってそれを埋めていかなければならないわけである。

この点についてサルトルは次のように説明している。「我々が私との関係を捉えることができないし決して与えられてもいないこの他者(下線原文)を、我々は少しずつ具体的な対象として構成している。つまり他者とは私の経験のある出来事を予見するのに役立つ道具ではなくて、他者として、つまり具体的に認識可能な対象として手の届かない所にある表象体系として他者を構成するのに役立つ私の経験の様々な出来事なのである。私が私の経験を通して(下線原文)絶えず対象としているものは、他者の感覚であり、他者の考えであり、他者の意欲であり、他者の性格である。それはつまり、実際のところ、他者は私が見る人だけではなく、私を見る(下線原文)人でもあるのだ。」(EN p.283)

ブルトンにとって他者の位置にあるナジャであるが、ブルトンはナジャをどのように見ていたのか、テキストに沿って明らかにしていこう。10月4日に初めて出会ったわけであるが、その日の別れ際にブルトンはナジャの中に「私が彼女にしか見たことがなかったこの軽やかさ」(PI p.688)を認める。10月6日にブルトンがかつて謎の女性に出会いそして見失ってしまったという一連の出来事を「新精神」と題した文章で記したことがあるのだが、その件についてナジャがブルトンに説明を求めた時に、詳しく説明することはできないという態度を示したことに対して、「しかし私は彼女が私を放免しないのがよく見て取れるし、私は彼女の眼差しの中に苛立ち、次に狼狽を察知する。」(PI p.693)

そしてこのあたりから *voir* という動詞は日本語で表記するなら「見る」ではなくむしろ「会う」とした方が適切であるように思われるのだが、それはそれだけブルトンとナジャの関係が深まっているからだと理解することができるだろう。10月7日の記述はこうである。「午前中ずっと、しかしながら、私はナジャに会いたくてたまらなかったし、今日彼女と会う約束をしていなかったことで自らをとがめた。私は私に不満だ。私は彼女を観察しすぎているように私には思われる、他にどうしたらいいというのか。彼女は私をどのように見ているのか、彼女は私をどのように思っているのか。もし私が彼女を愛していないのなら私が彼女に会い続けることは許し難い。(中略)どうしたらいいのか。では明日の晩まで待つことを決心するか、それは不可能だ。もし私が彼女に会わないとすると、午後どうするか。そしてもし私が最早彼女には会わなかったとしたら。」(PI p.701)

ここに記されているように、まさにどうしたらいいかという問題である。つまり見る、見られるということによって成立する関係というものがあり、それが不成立となるならば具体的に何をどうしたらいいのかという問題となるのである。例えばサルトルは次のような説明をしている。「他者は芝生を見つめるように私を(下線原文)見つめることはできないだろう。そして、更に、私が客観性はそれ自体私にとって(下線原文)世界の客観性から生じることはできないだろう、何故なら、まさしく、私は世界が存在する(下線原文)ようにさせる者、つまり原理として、それ自身のために対象であることはできないであろう者だからである。」(EN p.314)

つまり我々は絶えず見続けなければならないわけであり、見なければ世界の不在へと繋がることになるのである。従ってブルトンはナジャに会い続けなければならない。ところがその後の記述を見てみるならば、10月12日までの日記形式での記述の後、次のように書かれているのだ。「私は朝巨大な希望の羽ばたきがかりうじて恐怖のそれである物音と区別される世界の上

に彼女の羊歯の眼が開かれる(下線原文)のを見たし、この世界では、私は未だ眼が閉じられるのしか見たことがなかったのだ。」(PI p.714, p.716)

ここに至って最早他者としてというよりは一個の事物として捉えているような趣きがある。そしてその後のナジャとの関わりにおいて *voir* は使われることはなく、実際に会っているもしくは会うという場合には *revoir* が使われることになる。実際の記述をしてみるならば、次のようなものである。「顔面に拳骨の話は(中略)、10月13日の午後の初めに、彼女は私に理由もなく話していたので、危うく私を彼女から永遠に遠ざけそうにさえなった。(中略)私は最早ナジャに再び会うべきではない、いや最早会うことはできないだろうと考えて涙を流した。」(PI p.718)そして「私は幾度もナジャと再び会った」(PI p.718)。

ところがテキスト上においてブルトンがナジャと会ったという記述は見られなくなるし、実際会うこともなかったようだ。このナジャの物語が終わった後、「見る」「会う」*voir* という動詞がどのように使われているのかを見ておくことにしよう。ブルトンはナジャの物語が辿った場所を見直していくのであるが、そこにおける記述で次のようなものがある。「ボンヌ・ヌヴェル大通りは、その映画館の正面が塗り替えられ、その時から私にとってはあたかもサン・ドニ門が閉鎖されてしまったばかりであるかのように動かなくなっていたのに対して、一方で私は双面劇場が生まれ変わり再び死んでいくのを見た。」(PI p.748)

これと同様のものであるが、「ある街の外観」の変化についての記述の中で次のようなものがある。「何の未練もなく、この時私は街が別のものになり逃走するのさえ見ている。」(PI p.749)

このように世界は永遠不滅のものではなく移り変わっていくという一種の無常観すら感じさせる記述の後、ブルトンがシュザンヌ・ミュザールに出会うことによってこの *voir* の動詞は再び本来の役割を見出したかのような記述となるのである。「私がほとんど君のことを知らなかった時、君は最早思い出すことは出来ないけれども、偶然にも、この本の冒頭のことを知っていて、私がそれをく扉のように出入り自由にしたいと思っていたことそしてこの扉から恐らく決して君しか入ってくるのを見ないだろうということを恐らく私に思い起こさせるためにあんなにも都合よく、あんなにも激しくそしてあんなにも効果的に私のところに介入してきたのだ。」(PI p.751)

そしてブルトンは『ナジャ』の最後のあたりになって唐突に美について語り始めるのであるが、それも「君」との関わりにおいてなのである。つまり、「動的でもなければ静的でもなく、私は美を私が君を見たように見ている。定刻にそして時間限定で、私が希望し全霊でもってそれが繰り返されるがままになることを私が信じ、君を私に調和させたものを私が見たように。」(PI p.753)

このように *voir* という動詞はブルトンが世界をどのように捉えているかを見る一つの指標とも言うべきものであるが、*revoir* についても後どのように使われていたかを確認の意味も込めて見ておくことにしよう。ブルトンはナジャの物語が終わった後「私はこの物語が導くことになる場所のいくつかを見直すことから始めた。」(PI p.746)としているように、ここで *revoir* が使われている。またもう一箇所あるが、これは *voir* と同じようにシュザンヌ・ミュザールの存在を反映したもので、「君は、もちろん、理想的に美しい。夜明けに全てが連れ帰りまさにそ

のことによって私が恐らくは最早再び会うことのない君…」(PI p.751)という記述がある。以上のように見てくるならば、「見る」「会う」といった訳語を当てはめることのできる *voir* という動詞は世界の中に存在する方法として基本的なものと言えるだろう。しかし時期的には永遠のものではなくあくまで限定的であったブルトンとナジャの出会いがただ単に「見る」「会う」ということだけでは最早充分ではないということも同時に物語っているわけであり、*voir* はあくまで出発点ということになるかもしれないのである。

第五章 「知る」 *savoir*

我々が *voir* について使用されている箇所を指摘した際、故意に省略したところがある。それは 10 月 7 日にブルトンがナジャに会えない状態であることを反省的に捉えた箇所である。実際には次のように続くのである。「どうしたらいいのか。では明日の晩まで待つことを決心するか、それは不可能だ。もし私が彼女に会わないとなると、午後どうするか。そしてもし私が最早彼女に会わないとしたら。私は最早知る(下線原文)ことはないだろう。従って私は最早知らないということに値しただろう。」(PI p.701)

つまり他者との基本的関係を打ち立てるために「見る」「会う」という *voir* の行為が必要であったわけだが、それで充分というわけではなく、それではその先にあるものは何かということ「知る」 *savoir* ということなのである。「私とは誰であるか」という問いかけをし、我々がそれであるところのものであるという捉え方をする時、それを可能にするものは知り得た結果としての「知識」 *savoir* ということになるであろう。サルトルはこの点について次のように説明している。「そして対自の過去は対自にとっては知識 *savoir* のようなものである。しかしこの知識は不活性な所与としてあるのではない。それは対自の背後にあって、恐らく、このようなものとしては認識できず手の届かない所にある。しかし、その存在の恍惚として静的な状態のまともにおいて、対自が将来においてどうなるかを知らせてもらうのはこの過去から出発してなのである。(中略)しかし私はその知識(下線原文)でありそうである私の方法というのは——少なくともあるいくつかの場合においては——未だ私ではないものの外観のもとに最早私ではないものを私のところに持って来させることである。」(EN p.245)

我々の存在がそれであるところのもので捉えられる場合、それは当然のことながら単なる即自存在としてのみ捉えられるわけではなく、周囲の事物や他の人たちとのつまりは世界との関係によって構成されているわけであるが、その関係の出発点が「見る」「見られる」という関係であったとして、その次の段階に来るものが、その関係をどのように捉えたかという認識の問題であって、そのいわば堆積されたものが知識として捉えられ、我々の存在を成立させるわけである。このような考えに基づき『ナジャ』のテキストを見てみるならば、ブルトンは何を知ろうとしていたのか。まず『ナジャ』の第一部としてあるシュルレアリスムの体験の挿話の中に次のような記述がある。「私には何故だか知らないが、私の歩みが私を向かわせ、私がほとんどいつも決まった目的もなしに赴くのが、実際のところそこなのだ、この漠然とした資料、つまりそれ(?)(下線原文)が起こるであろうというのがそこなのだという決定的なものが何もないのにだ。私には、この素早い道のりにおいて、私の知らないうちにでさえ、空間的にも時間

的にも、引力の極を構成し得るであろうものが何か、ほとんど分からないのだ。」(PI p.661, p.663)

内容的には既に触れたような場所の問題や、後に詳述することになる問題が既に入って来ている形となっているのだが、ブルトン自身その理由が分からないと言っているにも拘らず、少なくとも問題意識として捉えられていることは指摘しておくべきだろう。むしろここにおいて問題に対する解答が明確には示されていないながらも、明らかに問題が提示されていることは注目しなければならない。これ以外に単なる事実関係の認識といった類の記述があるのだが、次の記述に関して言うと、明らかに対自的で、反省的なものが見られるように思う。つまり自分の中にある何らかの意識の変化といったものが対象となっているのである。つまり「その時私にとってこの手を永遠に離れるこの手袋という考えの中にあり得た恐るべきで、素晴らしく決定的なものが何か私は知らない。」(PI p.679)

この後ナジャの物語が始まるのであるが、10月4日のナジャとの出会いの中で、ブルトンは様々な会話を交わすわけであるが、その中にはブルトン自身の考え方も示されることになる。その中の一つが次のようなものである。「工場の炉で、あるいは一日中、数秒の間隔で、同じ身振りの繰り返しを強制する苛酷なこれらの機械の一つの前で、あるいは最も受け入れ難い命令の下されている他の至る所で、あるいは独房で、あるいは銃殺執行隊の前で、人はそれでも自分を自由と感ずることができるけれどもこの自由を作り出しているのは人が耐えている大きな苦しみではないということを私は知っている。」(PI p.687)

ここにおいて問題になるのは、知っている内容として示されている考えの正当性といったことではない。内容の是非ではなく、そこに自分を取り巻く世界に対してどのような考え方であれ、考えが示されているということが重要であり、我々がこの世界において存在していくためには、このような現状認識とも言える考えを持つことがまずは必要となるのである。その内容の正当性というのは次の段階の問題なのである。この後10月6日においてブルトンは「新精神」に謎の女性のことを書き、それについてナジャに説明を求められた時のことである。「私はそれについて何も知らない、このような領域において検証する権利は私には全て許されていることのように思える、私はこの背信の第一の犠牲者だったと答えなければならない」(PI p.691, p.693)。

ここにおいて知っているかどうかが問題とされている事柄は、単なる現状認識に留まらない。つまり知っておくべきことというのは、こういった事柄についてどのような意味を与えているのかという範囲にまで及ぶのである。次に10月7日においてブルトンはナジャと会えないでいることを残念に思うのだが、その時ナジャに会うことができなければどうなるのかという発想も出てくる。その考えに触発された記述が次のようなものである。「そしてもし私が最早彼女に会わなかったとしたら。私は最早知る(下線原文)ことはないだろう。従って私は最早知らないということに値しただろう。」(PI p.701)

ここで問題になるのが、この文においては目的語が示されていないわけで、果たして何を知ることになるのでしょうか。この文のすぐ後には「そしてこれは決して再び直面することはないだろう。」(PI p.701)と続いている。それではこれとは何かということになるのである

が、更に次のように続いているのだ。「これらの偽りのお告げ、ある日のこれらの恩寵、魂の真の難路、深淵、予見の見事なまでに悲しげな鳥が我慢した深淵があり得るのだ。」(PI p.701)

ここに至ってブルトンが問題にしているのは 10 月 4 日のナジャとの出会いであり、その時は深い意味を持ったものであると理解されていたのだが、それ以後も会い続けることによってナジャが自分の求めていた女性とは違うのではないかという疑念も生じ始めていたことも確かなことである。従って知るべき対象とはナジャであり、ナジャを通して様々な手掛かりを得て、ブルトンが求める人生における様々な謎の解明に役立てたいと思っていることが理解される。このように考えるならば、ブルトンはナジャを愛しているわけではなく、ナジャを通して見る自分の人生の意味の方がはるかに重要なのである。ところがブルトンはここまで書いているにも拘らず、自分が求めているものについては自覚的ではないかのようである。ブルトンは 10 月 12 日の記述をもってしてナジャとの一連の出会いをあたかも終わらせたかの如く、それ以後はむしろ反省的な記述が続くのであるが、そこにおいては何を知っているか何を知らないでいるかについて明確に書かれているのである。まず 10 月 12 日、正確には 10 月 13 日と言うべきであるが、その記述の後次のように書き始めているのである。「ここにおいてこの死に物狂いの追跡が終わるといふことがあり得るのか。何の追跡か、私は知らないが、このように精神的な誘惑のあらゆる技巧を尽くすための追跡(下線原文)なのだ。」(PI p.714)

何かを追い求めているにも拘らず、それが何かわからないということがあり得るのだろうか。確かにラカンの対象 a という概念を持ち出してくるならば、対象 a とはそもそも空虚なのであるから、その何かというものはあるかのように見えて実はないということであれば、追い求めているものが何かわからないというのは理解できない話ではない。しかし前提となるべき現状認識はあるのだ。つまり「現実、私は今や知っているが狡猾な犬のように、ナジャの足もとに横になったこの現実の前で、私たちは誰であったのか」(PI p.714)。

ところがブルトンとナジャはお互いのことを何もわからずにいたというわけでもないのだ。というのも次のような記述があるからだ。「私は、最初の日から最後の日まで、ナジャを自由な精霊、ある魔術の実践が一時的になつかせることが出来るが、服従することは問題になり得ないようなこれらの風の妖精のうちの一つのようなものとみなした。彼女は、語の真の意味において私を一個の神とみなし、私が太陽であった(下線原文)と信じることがあったということを私は知っている。」(PI p.714)

要するに対象は明らかにされているが、その本質や意味するところは不明ということなのである。しかしブルトンには理解されていることがあり、それはナジャをどのように位置付けるかといったことであるように思われる。つまりブルトンは次のように書いているのだ。「ナジャにとって、到着したいと思うことが既に非常に珍しく、非常に向こう見ずな地点からのこの出発(下線原文)は、偽りではあるが、ほとんど抗し難い人生の償いをするものを全て犠牲にして、最後の筏から故意に非常に遠く離れ、難破する瞬間に懇願するのがふさわしかった全てのことを無視して行なわれていたということを私は知っている。」(PI p.716)

このような関係は、ナジャという人物に対するのと同様に、ブルトン自身によって書き上げられつつある『ナジャ』というテキストに対しても成立してしまうのである。ブルトンはナジ

ヤの物語を書き上げた後、『ナジャ』を一個の作品として完成させることにためらいがあったのであるが、そのあたりの意識を明らかにしたものが次の記述である。「仮に私がこの物語を忍耐強くそして私が持っていると確信しているだろういわば公平な眼で読み直したとしても、私自身の現在の感情に忠実であるためには、何を残しておくことになるのか、私にはほとんどわからないのだ。私はそれを知ることに固執はしない。」(PI p.746)

ブルトンがここにおいて問題にしている「知る」ということの対象もしくはその内容についてだが、これはあたかもカントの言う物自体にも匹敵するような物事の本質に近いのではないかと思われる。そしてカントが言うように物自体というものは存在しないのだし、我々には把握することができない。とりあえず捉えることができるのは現象だけなのだとするフッサールの現象学の出発点を、ここにおいて我々は共有することができるのではないかと思う。ブルトンは知らない、わからないとは言いながらも、ある程度のことはわかっているという前提とも言うべき諒解事項があるのだ。だからこそブルトンはナジャの物語の後において「君」が出現した段階で次のように書くのである。「精霊、私はそれがどこにいて、それがほとんど何にあるかを知っている」と思っている」(PI p.751)。

とは言いながらも、この知っているということも限定的であって、ブルトンにしてみれば「君」が理想の女性であるということを諒解しているだけで充分なのである。つまり「私が知っていることはこの人格の入れ替えが君のところで止まるということだけであり、何故なら何ものも君に代わることはできないからであり、そして私にとってこの謎の連続が終わらなければならなかったのは大昔から君の前でだったからである。」(PI p.752)

ここにおけるブルトンの認識というのはあくまで主観的なものだろうが、それでも個人的な立場における現状認識として捉えられるものだろう。しかし『ナジャ』も最後の方になり、唐突に美についての言及も出てくるあたりになって、ブルトンにとって知っているということはどういうことなのか考えなければならなくなる。これは次の記述に関することである。「美はリヨン(下線原文)駅で絶えず跳びはねている列車のようなものでありそれについては私はそれが決して出発しないだろうということ、出発しなかったことを知っている。」(PI p.753)

これだけが示されているとよくわからないのだが、マルグリット・ボネの研究によると(PI pp.1562-1563)、当時ブルトンにとって理想の女性でありテキストにおいても「君」と表現されているシュザンヌ・ミュザールは後に彼女の夫となるエマニュエル・ベルルに連れられてリヨン駅からコルシカに出発しようとしていて、それを知ったブルトンが彼女を引き止めようとリヨン駅に向かったが叶わなかったという事実と関係があるのだ。確かにブルトンの願望としては列車はリヨン駅から出発して欲しくはなかったのだが、現実には出発しているわけで、ブルトンが知っているとする根拠がわからないのだ。

第六章 「思う」 penser と「信じる」 croire

penser も croire も訳す場合は「思う」という表現で充分であるように思われるが、これらの動詞の違いは前者が根拠を必要とするのに対して、後者はその根拠を必要としないところだ。例えば「私は神を信じる」と言う時、神の存在を証明することが前提とされているわけではな

く、つまりそういうことに関係なく神を信じるということなのだ。さてブルトンにとってのこれらの動詞の使い分けを見ていくことにしよう。まず *penser* だが、例えば次のような記述がある。「私は要するに(中略)私が、例えば、パリでモベール広場のエチエンヌ・ドレの彫像がいつも私に耐え難い不安を引き寄せると同時に引き起こしたと言うとしても、何から何まで私が精神分析の治療を受けるべきであるとただちに推論してもらいたくないのだ、それは私が評価している方法だしそれについてはそれが人間を排除することを狙っているものでは全くないと思っている、私はそれについて執行官の令状とは別の手柄を期待しているのだ。」(PI p.653)

ここにあるものは精神分析をどう思うかという考えが示されているわけだが、それなりの理論的根拠があった上での判断と思われる。また『ナジャ』の本体の部分の終わり近くで、「要はナジャにとって精神病院の内と外の間には極端な違いが存在し得るとは私には思えないということである。」(PI p.736)

ここに至ってブルトンは明らかに精神分析や精神医学についてある種の立場を保持していることがわかる。確かにブルトンは医学を学び、精神病院でインターンの仕事もしていたわけであるから、このような態度表明はむしろ当然のことであるだろう。これは次の記述においても同様である。「それに、私は最も良心的な精神科医であってもそのことを気にかけてさえいないと思う。」(PI p.739)

ところがナジャの物語以後の『ナジャ』という作品に対していささか懐疑的であり距離を置いて見るようになった時点のことを振り返った次の記述において、今まで見てきたような理論的根拠の存在があまり明確ではないような、むしろ違った意識のあり方が見て取れることになる。「中断の時期である 8 月末から、この物語が、今回は、精神というよりも心情に関わる感情の重みに打ちひしがれて、敏感になるがままというのは覚悟の上で私から離れていく 12 月末まで、この物語が守っていた最良の希望次に、信じたい人は私を信じるだろうが、まさに実現、完全な実現、そうなのだこれらの希望の本当とも思われえないような実現で——人が生き得るように——私はどうにかこうにか生きたという風に考える方がいいのだ。」(PI p.746)

ここにおいて重要であるのは、このように思うということではなくて、そのように思う方を好むということで、根拠の存在が明確ではないというか、ブルトン自身にしてみれば「希望の実現」というものが根拠あるものとして捉えられるということなのだろう。従ってブルトンにとって価値があるのは、客観的に証明されたというよりは、極めて主観的と捉えられるものではあっても自分自身の中ではある種の確証が得られたものということになるだろう。

それでは根拠なく信じるという *croire* の検討に入ることにしよう。ブルトンは『ナジャ』の冒頭において「私とは誰であるか。」という問いかけをして自らの人生に対する考察を展開しているのであるが、その中で次のような記述がある。「私の人生はこの種のイメージでしかないとか、探索していると信じているにも拘らず後戻りしていたり、かなりよく承知しているはずのことを初めて知ろうと試みていたり、忘れてしまったことのごく一部を覚えていたりということを余儀なくされているとかいうのはあるかもしれないのだ。」(PI p.647)

確かにここにおいて根拠と言われると明確に示すことはいささか困難であろうが、とりあえず自分としてはそのように思っているということであり、他に方法がないとも言えるのだ。つ

まり科学的方法によって検証するということが可能ではないし、そもそもそういうことになじまない事柄であり、かつ他人による確認を経て客観的認識に至るというものでもないのだ。だからブルトンがナジャの物語を始める前にシュルレアリスムの体験を挿話風に語っていくのであるが、それについて次のように表現しているのだ。「純粹に確認された事実といった種類のもものではあっても、どんな信号か正確に言うことはできないにしても、その都度信号というあらゆる痕跡は提示するし、孤独の真っ只中で、私が本当らしくもない加担をしていることを自らに発見するようにしたり、船の舵のところで自分が一人であると思う度に私の幻想を私に納得させたりする事実が問題なのである。」(PI p.652)

つまり我々が周囲の世界との関係において様々な思いを抱くことがあり、それは単なる思いにすぎないものからそれなりに思考を重ねたものまでいくつかの段階があるだろうが、そのそれぞれにおいて根拠を求めるということも不可能であるし、それが無責任な勝手な思いではないにしても、とりあえず自分はこのように思ったということが何ら嘘のない正直な思いであるということで事実であり、我々はそれを一つの段階として捉えなければならないのである。この後の *croire* の使われ方を見ていくと、日常的にもあるように確かかと言われるとそれ程の自信があるわけではないけれど、多分そうだと思うという感じで *je crois* が挿入されている用例が多い。そしてナジャの物語が始まると、ブルトン自身も信じられなくなるような事も起こることになるのである。10月4日の初めての出会いの際に、ブルトンはナジャに話しかけてみるのであるが、その時のナジャの反応である。「彼女は微笑む、しかし非常に謎めいていて、そして、何というか、その時私はそれについて信じることが出来ないけれども、理由を知っている」(下線原文)というようなものだ。」(PI p.685)

恐らくブルトンはナジャとの関わりにおいてよく理解できていない事柄も多くあったと思われるが、それはナジャについてだけの話ではなくて、ナジャによって指摘された自分自身に関することも含まれてくるのだ。例えば10月6日の記述において次のような指摘があるのだ。「彼女は今私の彼女に対する力、私が望んでいること、恐らくは私が望んでいると思っている以上のことを彼女に考えさせ行なわせる私が持つ能力について私に話す。」(PI p.693)

ここに至って根拠のあるなしの違いはあっても、自分の思っていることに基づいて自分と世界との関係が成立するというのではなく、自分の全く知らないところで成立する関係もあるのだということがわかる。このように考えるならば、我々は自分自身関知していない何ものかによって支配され為す術はないかのように思われるが、そうではないのであって、自由意志の領域というのではないにしても、我々に残されているものは充分にあるのだ。10月6日の出会いにおいて、ナジャには靈感があることがわかってくるのであるが、その不吉な状況において、これという程の根拠はないながらも、「私は今やまさにこれらの場所を離れる時であると思う。」(PI p.697)という判断をブルトンは下すのだ。我々が存在している時点で周囲の世界との関係は成立しているわけであるが、その周囲の世界に対して何らかの働きかけをする場合、その前提となるのがそれなりの認識に基づいた判断ということになるのである。ここにおいて問題にしているように根拠のあるなしということもあるが、結果的にその判断が正しかったかどうかということもあるだろうが、少なくとも自分はどのように思うかということがあるのだ。サル

トルはこの点について次のように説明している。「例えば認識と名付けられている存在とのこの関係の鍵を探さなければならないのはただ対自においてである。対自はその存在において即自との関係に責任があるというか、もしよければ、それは本来的には即自との関係の根拠として生じる。我々が意識を〈この存在がそれとは別の存在を前提としている限りにおいて、その存在において、その存在が問題になる存在〉と定義していた時我々が既に予感していたものである。しかし、我々がこの定義を表明してしまってから、我々は新たな認識を勝ち得た。特に我々は本来の無の根拠として対自の深い意味を捉えたのである。一般に認識すること(下線原文)と行動すること(下線原文)が現われ得る根拠として対自の即自に対する脱我的なこの関係を規定し説明するために、今や、これらの認識を利用する時ではないか。」(EN p.220)

このように考えるならば、ブルトンが意識としてどのような方向を目指していたのかという問題も視野の中に入ってくるはずである。ここにおいて再び *croire* の検証に戻るなら、ブルトンがナジャの物語以後において何を信じようとしていたのかがはっきりしてくる。まずブルトンがナジャの物語の見直しを場所を通して行なった時にボンヌ・ヌヴェル大通りが出てきたのであるが、その中の記述に「愛もしくは革命の最も絶対的な意味が問題になっていて残りの全ての否定をもたらささえすれば、特に同じような切望に屈服する全ての人々にとっても私にとっても」(PI p.748)というのがある。ここにおいてブルトンが愛と革命を信じ志向していたのは明らかである。その後「君」についての記述が始まるのであるが、ブルトンは「私は君の精霊の存在を盲目的に信じている。」(PI p.751)と書いている。愛を信じているブルトンにとって「君」はその現われなのであるから、当然のこととして理解されるべきだろう。この「君」の存在との関係で語られるべきなのであるが、ブルトンはナジャを見失って以降『ナジャ』を作品として仕上げることにためらっていたところ、「君」の出現によってそれなりの解決策を見出し、それをナジャの物語以後のテキストとして取り込むことにしたのであるが、仮に「君」が出現しなかった場合『ナジャ』という作品がどのようになっていたか興味のあるところであるが、その可能性を示唆したものが次の箇所である。「私が君と知り合う前にそれに与えようと思っていて私の人生への君の介入が私の眼には無駄にしたわけではなかった結論を思い出にして、それを別なように決めることもできると信じたのだ。」(PI p.752)

別の解決が可能であると信じるとは言いながらも、「この結論は君を通してしかその真の意味とその全ての力を持つことさえないのである。」(PI p.752)としているのである。これと同様の趣旨のものは、この後に美に対する記述が始まるのであるが、その中にも見られるのである。つまり「動的でもなければ静的でもなく、私は美を私が君を見たように見ている。定刻にそして時間限定で、私が希望し全霊でもってそれが繰り返されるがままになることを私が信じ、君を私に調和させたものを私が見たように。」(PI p.753)

ここで明らかになってくることは信ずるということは何ら根拠がなくとも成立するものであり、それが *penser* との違いであるとしていたわけであり、ある程度はそうなのであるが、それでも尚信ずるということが全く根拠を求めないわけではなく、それなりの根拠らしきものがあればそれに越したことはないのである。更に言うならば、出発点としては根拠のないものであった信ずるということが次第にその根拠を求めるようになり、信じたいがためにその根拠を

求めようとすると言ええるのではないかということなのである。もし根拠らしきものがあれば、信じていたものが存在することの証明ともなるのであり、無上の喜びとも言えるべきことなのである。このように考えるならば、信ずるが故にその根拠を求めるという行為がこの後存在するはずなのである。

第七章 「認識する」 *connaître* と「再認する」 *reconnaître*

信ずるが故の根拠探しの行為を検証していく前に、とは言いつつもそれが果たして前段階にあるものかどうか怪しいところがあり、既にこれは根拠探しの行為の中に含まれるものではないかという風にも理解することが出来るのであるが、我々はここにおいて「認識する」と「再認する」について検討を加えたいと思う。我々と世界との関係を図式的に捉えるなら、我々が世界を意識において捉え、その内容に基づいて何らかの行為に至るということなのである。従ってこの図式に沿って「認識する」なり「再認する」を位置付けるなら、意識において世界を捉えるという段階にあって、まだ行為には至っていないと理解することができる。ところがサルトルの次のような記述を目にする時、そのような図式的な捉え方は揺らぐのである。「熟考は認識というよりも再認(下線原文)である。それは埋め合わせの本来的な動機としてそれが回収したいと思っているものの熟考以前の理解を含んでいる。」(EN p.202)

このように考えるならば、既に何らかの行為があったということであり、それについての反省と考えるべきであろう。あるいはまた次のような記述もある。「認識する(下線原文)ことは(中略)しかも我が物にすることである。そしてだからこそ科学的探求は我が物にするための努力以外の何ものでもないのである。発見された真理は、芸術作品と同じように、私の(下線原文)認識である。」(EN p.666)

このように考えていくならば、認識するもしくは再認するということは単に内心だけの問題ではないことがわかる。確かに何らかの行動を取り得る状況にあるならば、ある種の認識は容易に行為に繋がり、一種の行為として位置付けられることも理解できるのである。こういった考えを前提にしてブルトンにとっての「認識する」と「再認する」を検討していくことにしよう。まず「認識する」であるが、これは最初から「再認する」との関係で言及されている。「私の人生はこの種のイメージでしかないとか、探索していると信じているにも拘らず後戻りしていたり、かなりよく承知しているはずのことを初めて知ろうと試みていたり、忘れてしまったことのごく一部を覚えていたりということを余儀なくされているとかいうのはあるかもしれないのだ。」(PI p.647)

この後自分が他の人たちといかに違っているかを問題にする箇所があるのだが、その中で「自分で知っているあらゆる種類の好み」(PI p.648)という表現がある。更にユイスマンスに言及している箇所では、「大変残念なことに私は彼の作品でしか彼と知り合いになることができなかったとしても、彼は恐らく私にとって私の友人たちの中で最もなじみがあるのだ。」(PI p.650)と書いている。ユイスマンスについては知り合いになるという意味での知っているということであり、その前の「知っている」については具体的に何をというよりも極めて内的な作業であって、それが即何かの行為や行動に繋がる類のものではないように思われる。むしろブルトンに

として「認識する」というのは、この種の内的作業というよりは、ユイスマンスにおいて使われているような意味合いの方が多いように思われる。例えばナジャの物語においては、エレーヌという名前の女性に関連して「私は個人的にはこの名前を持ついかなる女性も知らなかった。」(PI p.693)と書き、ドフィース広場については「このドフィース広場は確かに私の知る限り最も深く人里離れた場所の一つ、パリにある最悪の空地の一つである。」(PI p.695)と書いている。また 10 月 8 日にアラゴンからの手紙の中に入っていた写真複製について、「私が知らなかったウッチェロの絵」(PI p.703)と表現している。このあたりは大して問題もないのだが、10 月 12 日のナジャの物語も終わりを迎えつつある段階で、ブルトンはナジャについて次のように指摘しているのだ。「夕食後、パレ・ロワイヤルの庭園の周りで、彼女の夢は私が彼女についてはまだ知らなかった神話的な性格を帯びた。」(PI p.710)

今まで知っているナジャとは別のナジャが出現したということなのだが、ブルトンにとってはこの *connaître* は「認識する」というよりも「知り合う」「知っている」ということで人物について使われることが多く、それもブルトンにとっては理想の女性に関してなのではないかと思われる。特にナジャの物語が終わり、「君」という女性が出てくる箇所における使用はまさにそれである。自己同一性についての問題に言及したドゥルイ氏の話を紹介した上で、「私は君のことをほとんど知らなかったけれども、私もまた、君に(下線原文)語りたいという欲望に屈したのがこの話なのである」(PI p.751)。

その後、「君がいなければ私がいつも自分で知っていた精霊へのこの愛、その名のもとに私はあちらこちらでいくつかの再認を試みることにできなかったこの愛について私はどうしよう。」(PI p.751)

更に『ナジャ』という本を完結する方法について思案していたことに関連して、「私が君と知り合う前にそれに与えようと思っていて私の人生への君の介入が私の眼には無駄にしたわけではなかった結論を思い出にして、それを別なように決めることもできると信じたのだ。」(PI p.752)

ここにある関係を図式的に捉えるなら、ブルトンがある女性と知り合う、それが作品として結実されるということであり、当初その女性とはナジャであったのだが、ナジャの物語がとりあえず成立した後については「君」と呼ばれる女性であり、この女性と知り合うことによって『ナジャ』が一つの作品として成立したというわけである。

次に「再認する」*reconnaître* であるが、既に *connaître* の箇所でも *connaître* と並立して出てきており、それはただ単に一度認識したものを再度認識するということに留まらず、認識するということは既に認識されたものであり、それはブルトン以外の誰かによってということもあり、あるいはブルトン自身が無意識のうちに認識していたものを改めてということもあるだろう。確認の意味で「再認する」が使用されている箇所を指摘しておくなら、次のようなものである。まずブルトンはランボーの呪文の力について言及していて、「ナントであったある街のはずれの私の毎日の道筋で、衝撃的な照応が、他の場所での、彼の道筋と作り上げられていた別荘の角、庭の突出部、私は彼の眼によってのようにそれらを再認していた」(PI p.676)。

また無意識について言及した箇所があって、そこでは次のように書かれている。「私に私の説

得力ある行為だけを起こさせる生き生きとしてよく響く偉大なる無意識がいつまでも私である全てを自由にせんことを。私はここにおいて私が新たに無意識に与えるものをそれから取り戻すあらゆる機会をわけもなく自分から取り除くのだ。私はもう一度それだけしか再認しないこと、それしか当てにしないことそして私の眼の中にあることを知っていて夜の小梱にぶつかるのを免れさせてくれる光る点を私自身見つめながら、広大な防波堤をほとんど心ゆくまで踏破することを望むのだ。」(PI p.749)

再認するということは既に認識したものを更にもう一度認識するということであるなら、何を認識するのか。ブルトンにしてみれば *connaître* は「認識する」ではなくむしろ「知り合う」という意味合いで使われ、その対象は理想の女性であるということは既に見たところである。それではそのためにブルトンは何をすることになるのか。ここに至って我々は認識論から実践論への移行の段階に向かうことになるのである。

第三部 実践論的観点

第八章 「持つ」 *avoir*

サルトルは『存在と無』において研究を進めていく方針について述べているのだが、それは我々にとっても示唆的なものである。つまり「我々は唯一の振舞いの研究に限定することはいだろう。我々は逆に、〈人間-世界〉の関係の深い意味に至るまで、振舞いから振舞いへと、いくつものものを叙述し洞察しようとするだろう。しかし何よりもまず我々の研究において導きの糸となる役目を果たし得る根本の振舞いを選ぶことが適当である。」(EN p.38)

その上でサルトルは『存在と無』の第四部において「持つ、する、である」として考察を深めていくのであるが、その冒頭には次のように書かれている。「持つ、するそしてであるは人間的現実の基本的な範疇である。それらの範疇はそれらのもとで人間の全ての振舞いを包摂している。認識する(下線原文)ことは、例えば、持つ(下線原文)ことの一つの様相である。これらの範疇はそれらの間にあって繋がりが無いのではなく、何人かの著者はこれらの関係に固執した。」(EN p.507)

我々は第五章において「知る」、第七章においては「認識する」を考察したわけであり、本章においてはその一般的な様相として捉えられる「持つ」 *avoir* について考察していくことにしよう。テキスト中においては、ただ単に手に持っている物を描写したり、*avoir* を使った慣用的な表現もいくつか見られ、特別な意味合いを持っているとは思われない箇所もあるが、サルトルが「認識する」が「持つ」の一つの様相であると指摘したことを裏付ける箇所もいくつか存在する。例えば『ナジャ』の冒頭においてブルトンが自分であるために幽霊の役をしなければならぬという内容の指摘をした上で、次のように書いているのだ。「時間と場所のある種の偶発性への盲目的服従におけると同時にその外見において〈幽霊〉が提供している因習的なものとともに私がそれについて抱いている表現は、何よりも、私にとって、永遠であり得る苦痛の有限なイメージとして価値がある。」(PI p.647)

確かに内心において何らかのイメージや概念を持っているということは即ち「知る」であり「認識する」であるということは理解できる。つまりはまず内心において何を持つことになる

かが世間との関係を成立させ、場合によってはその関係を変えていこうとする時の出発点となるわけである。また何らかの関係が成立した後すぐに忘れてしまうものもあれば、心に残り続けるものもあり、それがそれ以降の関係に影響を与えるということも充分理解できる。例えばロートレアモンについては次のように書いている。「確かに、ロートレアモンが彼の作品の背後に全面的に消失したこと程私を魅了することはないし私はいつも彼の情け容赦のない癖、癖そして癖>をはっきり覚えている。j'ai toujours présent à l'esprit」(PI p.651)

つまり我々は外の世界との関係において、既に取捨選択をしているのである。単純な言い方をするなら好き嫌いということであり、我々が出発点と思っている時点で我々が何ら関与していないただ単に与えられたものを受け入れているだけだということではないのだ。そこにはある種の志向性が見て取れるわけであり、ブルトンが次のように書くこともその意味で理解されるべきだろう。つまりブルトンはナジャの物語を始める前に、シュルレアリスムの体験と表現し得るような挿話をいくつか紹介しているのであるが、それを書き始めるにあたってのいわば態度表明のようなものである。「私がこれから取り掛かる物語の外に、有機体的な面の外で私が理解できるような(下線原文)私の人生の最も重要な挿話しか詳細に語るつもりは私にはないのだ。Je n'ai dessein de relater」(PI p.651)

これらの挿話の中にいくつかの取捨選択が示されることになるのだが、都市については次のような箇所がある。「ナント、恐らくパリとともにその苦勞に値するものが私に起こり得るといふ印象を私が持つフランスの唯一の都市」(PI p.658)。

場所に関して言うなら、ただ単に存在するというだけではなく、その場所についても取捨選択の余地はあるわけで、その一つの例が次のようなものである。ブルトンは夜どこかの森で美しい女性に出会うことをひたすら願ってきたのであるが、そのような状況についての記述である。「私は、全ての中で、最も気転(下線原文)を欠いたということがありそうな状況である、こういった状況が大好きである。私は思うに、逃走するという状況を、持つことすらなかっただろう。」(PI p.668)

つまり我々の中にはその存在として何らかの願望なり能力なりがあってある種の状況に直面するならば、どのような反応や対応を示すことになるかはむしろ必然的とも言えると考えるなら、具体的に目に見える物ではなくても、内心においてどのようなものを持っているかということが全てを決定すると言えるわけである。このように考えるならば、ブルトンがナジャと出会うことも必然的であったと言うべきで、それはブルトンがナジャに初めて出会った 10 月 4 日の記述に次のようなものがあるからである。「昨年の 10 月 4 日、全く暇で非常に消沈した最近の午後の終わりに、私はそういう時を過ごす秘訣を持っているので、ラファイエット通りにいた。」(PI p.683)

つまりブルトンにはこの「秘訣」があったがために、ナジャと出会うべくして街に出ていることになる。あるいは仮にナジャと出会うような状況であったとしても、見過ごしてしまっていて、ナジャはただの通行人の一人にすぎなかったということになるだろう。ところが内心に何かを持っていれば状況を変化させることが出来るかということと必ずしもそうではなく、そのあたりのことがそれ以後のブルトンとナジャとの関わりにおいて表わされることになる。まずブ

ルトンにはナジャを変化させるある種の能力があるとナジャによって指摘される。つまり「彼女は今私の彼女に対する力、私が望んでいること、恐らくは私が望んでいると思っている以上のことを彼女に考えさせ行なわせる私が持つ能力について私に話す。」(PI p.693)

これが事実であるならば、ブルトンはこれといった行為を伴うことなく思いのままナジャとの関係を成立させられるはずである。ところが確かにこれはブルトン自身の見解ではあるものの、事態はそのようには推移しないのである。10月12日の、つまり日記形式で語られるナジャの物語の最終日であるが、ブルトンは次のように書いている。「私は彼女の独り言を理解することがだんだん難しくなる *J'ai de plus en plus de peine*」(PI p.713)。

つまりブルトンの内心においてはナジャは必ずしも好ましい存在ではなくなってきたわけで、10月12日以後ブルトンがナジャに会ったことを記す段階において次のように書いているのである。「同時に取り返しのつかない災厄が彼女自身のそして最も人間的に限定された部分を引きずって、私がその日にその思いを持った災厄が少しずつ私を彼女から遠ざけたということはあるかもしれない。」(PI p.718)

つまりブルトンはナジャとの関係を好転させようとしているのではなく、むしろ解消させようとしているのであって、そのように考えるならば事態はブルトンの思惑通りに進んでいると言えるかもしれない。ただブルトン自身がナジャに対してどれだけ影響力を持ち得たのかについては別問題であって、その点についてもブルトンは懐疑的なのである。つまり「しかしある数日間彼女は私の話している言葉に少しも注意を向けることなく、私の存在だけで生きているように思われていたし、彼女が私とどうでもいいことを話しているか黙っていた時に、私の心配事に少しも気をつけることさえないように思われていたので、彼女がこの種の困難を普通に解決するのを助けるために私が彼女に対して持ち得た影響力を私はかなり疑っているのだ。」(PI pp.718-719)

そして終いにはブルトンはナジャとは理解し合えなくなった、むしろ今まで理解し合ったことなどなかったのかもしれないとまで考えるようになるのだが、この時点においてブルトンがナジャに対して内心で抱いているものをナジャ自身が理解していないということで、内心と現実とは別物といった状態に至るわけである。具体的には次のように書かれている。「彼女は今度という今度はそれを全く考慮に入れない、時間に関心になる、たまたま彼女がすることになった無益な話と私にはひどく大事であった別の話の区別が全然つかない、私の一時的な気持ちと彼女が彼女の最悪の放心状態になると私が抱いていた多かれ少なかれ大きな困難を全く気にかけないということに決めていたのだった。」(PI p.735)

つまり内心の問題というのはサルトル風に言えばあくまで対自的なものであって、それが我々と世界の関係を変え得る可能性を全く否定するものではないにしても、あくまで内心の問題として留まる可能性も大いにあるということなのである。この点についてブルトンは能力の問題として捉えていて、次のように書いているのである。「私がそれについていかなる欲望を抱いていたとしても、恐らくはまたいかなる幻想であったとしても、私は恐らく彼女が私に眼前三らせていたものに耐えることはなかったのだ。」(PI p.736)

ところがこれはブルトンがナジャとの関係を解消しようとしたために設けた口実であって、

そのように考えるならば、ブルトンは世界を自らの内心通りに表現しているのだと理解することもできるだろう。そのような理解が可能になると思われるのは、ナジャの物語以後の特に「君」という女性が登場してから記述において内心と世界との一致が見て取れるからである。具体的に見ていくなら、ブルトンはナジャの物語を書き終えた後『ナジャ』という作品として完成させることにためらいがあった。それは文学的な理由というよりはむしろ女性関係を主とした私生活における要因が大きいと思われるが、その間に「君」という女性が登場するわけである。従ってブルトンは作品の完成に関連して、次のように書くのである。「まさに印刷された文の中にある言葉の突然の間隔、合計することが問題になり得ないようないくつかの節の下に話しながら素早く書きとめている線、日ごとにあるいはまた別の日に、解決を期待させることができるといった問題の資料をことごとくひっくり返す出来事の完全な省略、思い出のうち最も具体的なものととも表明することを考える最も間接的な考えが時間に沿って引き受けたり転嫁したりする決定できない感情の係数が、この本の頁をめくると、2頁より早く終わったばかりのように思われる行とこれらの最後の行を切り離している間隔にしか興味を持つ勇気がないのだ。je n'ai plus le cœur」(PI p.744)

仮に「君」という女性が登場しなければナジャの物語は全く違った展開になった可能性も充分にあるわけで、仮にテキストとしては完成されたということではあっても、ナジャの物語はブルトンの意識の中では終わることができなかったに違いない。ところが「君」という女性が登場することによって、明らかにナジャは過去の実在になったのであり、ヘーゲルの言うように全てが終わったという意識のもとで歴史的な視点から物語を完成させることができるのである。だからこそブルトンはナジャの物語に対して第三者的な立場を持つことができるのであり、次のように書くこともできるのである。「仮に私がこの物語を忍耐強くそして私が持っていると確信しているだろういわば公平な眼で読み直したとしても、私自身の現在の感情に忠実であるためには、何を残しておくことになるのか、私にはほとんどわからないのだ。」(PI p.746)

つまりナジャの物語以後のブルトンにとって大事であるのは「君」という女性の存在であって、ここにおいてブルトンの内心と世界とがまさにバランスよく一致した形で好ましい関係を成立させているのである。このことは次の記述からも窺い知ることができるだろう。「精霊…この記号のもとに私に現われそして私が君のところで持つことを止めた何人かの可能なとりなす人々から更に私は何を期待することができるだろう!」(PI p.751)

ここにおいて問題になってくるのが、我々と外界とのバランスの取れたよい関係ということであって、ブルトンにとって「君」という女性が登場することによって世界との良好な関係を築けたとしても、仮に「君」という女性がいなければどうなっていたのであろうか。現実が自分にとって思い通りの形で存在することはあり得ないとしても、仮に取捨選択できるということで考えていくならば、幸運にも外界と良好な関係を築くことが可能になるということなのだ。しかし現実はそのように自分の思い通りに存在するということが一般的にあり得るのだろうか。もしそうではないとした場合、外界との良好な関係を築くために少なくとも我々は何をしなければならないのだろうか。

第九章 「する」 faire

faireという動詞は何かを「する」であるとともに何かを「作る」ということでもあり、我々はその都度使い分けをしていかなければならないわけであるが、ブルトンがナジャの物語を始める前にシュルレアリスムの体験を挿話として語っていくに際して、そこで問題になる世界は次のように表現されている。「私の人生は、最大のものととも最小のものも、偶然に委ねられていて、私がそれについて抱く je m'en fais 普通の考えに逆らって、禁じられたもののような世界に私を招じ入れる」(PI p.651)。

またしても内心の問題として捉えられることになる。ところがナジャの物語が始まると faire は明らかに何かをするという意味で捉えられる。具体的に見ていくなら、慣用的な表現でここにおいて特に問題にする程でもない箇所を除けば、次のような例がある。10月7日ブルトンはナジャと会う約束をしていなかったために後悔の念にかられるのであるが、そこで様々な反省の思いが出てくるのである。「私は彼女を観察しすぎているように私には思われる、他にどうしたらいいというのか。」(PI p.701)

「私が彼女に示している関心の種類について彼女を安心させないこと、彼女は私にとって好奇心の対象とか、彼女はしたら信じることができるだろうか、浮気の対象ではあり得ないということを私が彼女に納得させないこともまた許されないことだろう。どうするか。」(PI p.701)

「もし私が彼女に会わないとなると、午後どうするのか。」(PI p.701)

「6 時頃私たちが既に出会ったことのある酒場に赴かないとしたら、私は何をすることができるのか。」(PI p.701)

更にナジャの物語が終わり「君」という女性が出現した後で、ブルトンは「君」という女性の重要性を語るのであるが、その中には次のような記述がある。「君がいなければ私がいつも自分で知っていた精霊へのこの愛、その名のもとに私はあちらこちらでいくつかの再認を試みることしかできなかったこの愛について私はどうしよう。」(PI p.751)

つまりここで明らかなことは、ナジャであれ「君」という女性であれ、ブルトンにとって理想の女性の出現もしくは存在が重要であるように思われるということだ。だから一時的であるにせよ、彼女たちと会えないとなるとどうしたらいいのかという問いかけとして出てくることになる。それに対する答えとしては会うしかないということであり、それもそのような存在が前提としてあることが必要になってくる。

第十章 「愛する」 aimer

ナジャであれ「君」という女性であれ、ブルトンにとっての理想の女性の存在が一時的ではあっても現実のものとなっている以上、「愛する」aimer という動詞が出てきたとしても不思議はないのであるが、とりあえずテキストに則して見ていくことにしよう。そこに見られるものは、例えばナジャの物語が始まる前段階においては物事を選択でこちらの方がいいとか、あるいは「私がある公園を愛したナント、プロセ公園である。」(PI p.661)という使われ方である。

そしてサントゥアンの蚤の市に出かけた時、オブジェを探す時の基準として「要するに私

が理解しそして私が愛する意味で倒錯的な」(PI p.676)というような使われ方であり、我々が求めているものとは違う。またナジャの物語においてナジャに対してこの *aimer* が使われる箇所があるのだが、そのどちらも、例えば「もし私が彼女を愛していないのなら私が彼女に会い続けることは許し難い。私は彼女を愛していないのか。」(PI p.701)というように否定形での使われ方なのだ。10月12日までの記述が終わった後、ブルトンはナジャとの関係について反省を加えていくのであるが、その中でナジャとは全く関係なく次のような記述がある。「私は違法な時間に、光の弱いランプを使って明るくする女性の肖像画を、不自由なく眺め入ることができるように夜美術館の中に閉じ込められるがままになるこれらの人たちが大好きである。」(PI p.716)

これはまさに自己言及的な表現である。この後アンリ・マチスが所有していた仮面が好きだったという使い方をしている。そしてナジャの物語が終わった後の部分で、ブルトンは反省的な記述を始めるのであるが、*aimer* の対象はナジャではなくて自分の人生の方なのだ。具体的な表現を見ておくと、次のようなものである。「私が息の長い企てをついしたくなることができていることによって、私が愛するようなそして実際に現われているような人生、つまり息が切れるような(下線原文)人生には値しないと確信しすぎるくらいだ。」(PI p.744)

以上のように見てくるなら、ブルトンは本当にナジャを愛していたのかどうかも疑わしくなってくるわけであるし、ブルトンの目的が果たしてそこにあったのかどうかもわからなくなってくるのである。恐らくブルトンの目的は別のところにあったように思われるのだが、果たしてブルトンは何を望んでいたのであろうか。

第十一章 「望む」「欲する」 *vouloir*

ブルトンが何を望んでいたのかについて *vouloir* という動詞に注目して検証していくことにしよう。例えばナジャの物語の始まる前段階においては、次のように使われている。「私が森のはずれにある、茨の茂みで人工的に隠されたあばら屋の中で、邪魔されないことを望む時、そこにいるよう申し出られたアンゴの館」(PI p.653)。

「私が『ナジャ』を書こうと望んでいた以上、違った方法があったというのはあり得たのか。」(PI p.653)

あるいはある芝居に言及する時に、次のように表現している。「私が覚えていたい(中略)唯一の演劇作品として残りそして長い間残るだろう。」(PI p.669)

これ以外は *vouloir dire* ということで、これこれのことを言いたいという風に使われている。ナジャの物語においては、次に挙げるもの以外は特段指摘する必要もないであろう。一つは10月4日の初めての出会いの日の別れ際のブルトンがナジャにした問いかけである。つまり「まさに立ち去るところで、私は他の全ての問いを要約する問い、恐らく、それをするためには私しかないが、しかし、少なくとも一度は、それに値する答えを見出した一つの問いを彼女に提示したいと思う。」(PI p.688)

もう一つは、ナジャと出会うこともほとんどなくなった段階で、ブルトンがナジャのことを反省的に捉えている箇所にある。「私は、何日か経って、私の前で発せられたり彼女によって私

の目の前で一気に書かれないいくつかの文しか最早覚えていたくはないのだ。」(PI p.719)

ナジャを目の前にしながらもブルトンにとって望むことは、あくまでブルトンの内心の問題であることがわかるだろう。そしてこの傾向はナジャの物語以後の思索的な部分において更に強まるのである。これは既に指摘した箇所だが、無意識に対する信仰を示すもので、「私はもう一度それしか再認しないこと、それしか当てにしないことそして(中略)広大な埠頭を心ゆくまで踏破することを望むのだ。」(PI p.749)

この後ブルトンは「君」という女性に語りかけるという形を取るが、この中で『ナジャ』という作品そのものに言及して、「私がそれを<扉のように出入り自由>にしたいと思っていたこと」(PI p.751)を明らかにしている。ブルトンがこの「君」という女性に執着していることは明らかであるが、この「君」という女性に対して精霊という言葉で表現しようとする時、もしその女性が精霊という表現を嫌うならばということで次のように書いている。「しかし私はその時には全くそれを追い払いたい。」(PI p.751)

また「君」とブルトンが『ナジャ』に与えようとしていた結論との関係にも言及して、「私が君と知り合う前にそれに与えようかと思っていた結論」(PI p.752)の存在を明らかにしているし、この結論との関係で「それを知っているという誇り高さ、私がその前でそしてその前でのみ自分に望む絶対的な謙譲」(PI p.752)を問題にしてもいる。そして最後に美との関連で「それは私が自分に与えたいとは思わない全ての重要性を持っている。」(PI p.753)と書いている。

以上のことから明らかなように、ブルトンにとって望むことも全て内心におけるものののだ。このように考えるならば、ブルトンの内心において全ては始まり全ては終わるということなのか。この精神の自給自足的なあり方はシュルレアリスム的であるとも思えるが、一方で現実と直接的に関わる行為は存在しないのかという疑問が生じるのだ。

第十二章 その他の移動を表わす動詞

我々はこの論考においてサルトルの言う「人間の世界との関係を私に明らかにし得るある振舞い」(EN p.38)があると思い、それを深く確認する意味でテキストの分析を続けていたのだった。ここにおいて考えるべきは、そもそも我々を取り巻いて我々に対峙している世界とはどのようなもので、それに対して我々は何をすればその世界との関係が成立するのかという根源的な問題である。この問題を解決するに当たっては、サルトルの『存在と無』における対自存在についての説明のある部分が参考になるだろう。そこには次のように書かれているのだ。

「私に対して現われる本来の空間は道路的空間である。つまりそれは道路とか街道とかが行き交っていて、道具的で道具の地形(下線原文)なのである。このように世界は、私の<対自>の出現からすぐに、すべき行為の指示として明らかになり、これらの行為は他の行為を参照させ、更にそれがまた別の行為というように続くのである。」(EN p.386)

そして似たような記述は『存在と無』の第四部の第一章「であるとする、自由」(EN p.508)にも見られる。「従って仮に私が田園を横切って歩いているとすると、私に対して現われるものは周囲の世界であり、私の意識の対象であるのはそれであり、私に固有の可能性——例えば、

今晚前もって自分で決めておいた場所に到着するそれに向けて私が超越するのはそれなのである。」(EN p.531)

ここにおいて示されている道とは、例えば私の人生において歩んできた道といったような比喩的なものではなく、まさに文字通りの道であって、それによって世界は我々に対して開示されるのである。このように考えるならば、これまで対自的であった諸行為が、世界に対して開かれたものになる解決の糸口を見出したも同然である。つまり我々が注目すべきであるのは、実際にブルトンが移動していることを表わす動詞だったのである。当初我々はそのような動詞をいくつか見出せるものとして考察を始めたのであるが、むしろそれは様々な動詞に形を変えて存在しているように思われる。

これからいくつかの動詞について見ていくことになるが、その順序については重要性の度合いがあるというものでもないということは分析を進めていく上で明らかとなるであろう。まず精神的な深まりが現実の具体的な行動になって現われるというものに次のような箇所がある。これはナジャの物語の前のシュルレアリスムの体験を物語っている挿話の中にあるのだが、使われている動詞は「戻る」*revenir*と「行く」*aller*である。「しかし、私にとって、本当に精神の奥底に降りること、そこでは夜になりそして明ける(それはだから朝ということか)ということは最早問題ではなく、それはフォンテーヌ通りの、その時以来キャバレーに代わった<双面劇場>に戻ることである。私が舞台に対してあまり意欲がないのを無視して、批評家たちがそれに対して仮借のない態度を示して、禁止を要求するまでに至った程なので、そこで上演されていた芝居が悪いということはあり得ないと信じて、私はかつてそこに行ったことがある。」(PI p.669)

併せて注目しておくべきは、ここにおいてフォンテーヌ通りという地名が明記されているのである。

次に *aller* という動詞が使われている注目すべき箇所は、ドフィーヌ広場について言及したところである。「このドフィーヌ広場は確かに私の知る限り最も深く人里離れた場所の一つ、パリにある最悪の空地の一つである。私がそこに行く度に、私は他の所に行きたいという気持ちが少しずつ私から離れていくのを感じた」(PI p.695)。

この箇所から連想されるのは、ボードレールの『悪の華』の中にある「この世の外へならどこへでも」という詩である。ブルトンにはボードレールのような異国趣味が鮮明にあるとは思わないし、フェルディナン・アルキエが『シュルレアリスムの哲学』において指摘しているように、ブルトンはこの現実において幸福を追求しているのであるが、ここではないどこかという意識があるように思われる。

次に「来る」*venir*について見てみると、『ナジャ』の冒頭の「私とは誰であるか」という問いかけに続く省察のいわば結びの部分で、「他の全ての人たちの中にあって私はこの世において何をしにやってきたのか」(PI p.648)という表現をしている。「この世」ということであって、一般的というか概括的な表現で具体的な地名とかは明示されていないが、文脈としては当然のことと言えるだろう。そしてこの「何をしに」ということを自ら明らかにする過程で、何をしていくかというまさに探求という行為の中にあって、サルトルの言うような道を歩くという表

現が出てくるのである。確認の意味で明らかにしておくなら、ここで使われている動詞は「歩く」*marcher* であり「探す」*chercher* である。「私は、もう一度言うが、自分が昼間歩く者であると思うよりは夜中歩く方を好む。(中略)各自が自分自身の人生の意味の啓示を期待する権利がある出来事、恐らく私はまだ見出していないが自分を知ろうと努めている途中にあるこの出来事は、労働の代価ではないのだ(下線原文)。」(PI p.681)

ここでも一般的な表現であって、具体的な地名は明記されていないのだが、この「知ろうと努めている」*chercher* が使われている別の箇所、それはナジャの物語の後の反省的な部分においてであるが、ボンヌ-ヌヴェル大通りという地名が明示されている。つまり「ボンヌ-ヌヴェル大通りは、(中略)私のものであった期待に応えるように思われた後、私が混乱に関して探し求めている(中略)大いなる戦術上の拠点の一つ」(PI p.748)と書かれている。ボンヌ-ヌヴェル大通りに関して問題になっているのは革命であるが、他の場所において問題になっているのはブルトンにとってのもう一つの重要な主題である愛であって、恐らく全ての場所とそれに伴う行為はその観点で理解されるべきなのである。例えば具体的な地名は明記されていないが、「散歩する」*me promener* という動詞に関して言うなら次のような箇所がある。「ランボーが 1915 年頃私に及ぼしてそして、その時以来、『献身』のような稀な詩で純化された呪文の力は、私が土砂降りの雨の中一人で散歩していたある日、先に私に言葉をかけてきた若い女の子に出会ったということで、恐らく、その当時、私にとって価値があったものである」(PI p.676)。

そしてこの街中の散策から女性との出会いに至るとい形のものであるが『ナジャ』におけるナジャとの出会いであって、ナジャの物語の冒頭はまさにその典型と言えるものである。ここで使われている動詞は「にいたる」*me trouver*、「(道を)続ける」*poursuivre*、「横切る」*traverser* といったものであるが、むしろ注目すべきは場所が明確になっているということだろう。具体的に見ていくと、次のようになっている。「昨年 10 月 4 日、全く暇で非常に消沈した最近の午後の終わりに、私はそういう時を過ごす秘訣を持っているのでラファイエット通りにいた。『ユマニテ』の書店の陳列窓の前で数分間立ち止まりそしてトロツキーの最新作を買入れた後、目的もなく私はオペラ座の方向に道を取り続けていた。(中略)私は、そこ、ある教会の前の、名前を忘れているか覚えていないかどちらかのこの十字路を横切ったばかりだった。」(PI p.683)

このような出会いは 10 月 6 日にも繰り返されていて、使われている動詞は「ぶらぶらする」*flâner*、「出かける」*sortir*、「赴く」*me rendre*、「辿る」*suivre* といったようなものだが、ここでも場所について明記されている。具体的に見ていくと次のようになっている。「あまりにも(下線原文)ぶらぶらしすぎなくていいように(下線原文)、私は 5 時半にナジャと合流するはずになっている<ラ・ヌヴェル・フランス>に歩いて赴くつもりで 4 時頃出かける。大通りからオペラ座までの遠回りの時間で、私はちょっとした買物の用がある。いつもとは反対に、私はショセーダントン通りの右側の歩道に沿って行くことに決める。私がまさにすれ違おうとしている最初の通行人たちの一人が、一日目の様子をしたナジャなのである。」(PI p.691)

このような繰り返しは 10 月 7 日にもあって、使われている動詞は「出かける」*sortir*、「走る」*courir* といったもので、かつ場所についても明らかになっている。文中でも示されている

ことだが、ここまで来ると確かに偶然の出会いではあるだろうが、ブルトンの意志も同時に介在しているように思われる。具体的に見ておくと次のようになっている。「私は 3 時頃私の妻と一人の女友達と一緒に出かける。タクシーの中で私たちは昼食の間そうしていたように、彼女について話し続ける。突然、私は通行人に何ら注意を払っていないにも拘らず、何かわからないが素早い斑点が、そこ、左側の歩道の、サン-ジョルジュ通りに入るところで、私をほとんど機械的に窓ガラスにぶつからせる。それはあたかもナジャが通ったばかりであったかのようだ。私は行き当たりばったり、彼女が取り得た三つの方向の一つの方に走る。」(PI p.701)

そしてここまで来ると、ブルトンとナジャの偶然の出会いということは最早なくなり、二人は約束して当然の如く会うことになる。そして移動するというのはブルトン一人ではなくてナジャと共にであり、その一例が次のようなものである。「私がヴェルサイユからパリへの街道で自動車を運転していたある晩、私の傍らにいた一人の女性はナジャであった」(PI p.748)。

もっともブルトンとナジャとの出会いは一時的なものであり、ナジャと二人で街中を移動するということが本来あるべきものであるとは思われない。それでは何故ブルトンは街中、具体的にはパリの中を移動することになるのか。それは街中で理想の女性に出会うことを目的としているのか。一見そのようにも思われるのだが、『ナジャ』においてナジャの物語以後の内省的な部分、そして更にパリの街を改めて見直そうとする行為から、ブルトンには更にその先を見ているように思えてならないのだ。

終章

『ナジャ』の中にはパリ市内の各地が実名で登場していて、別に観光名所案内の様相は呈していないけれども、我々もブルトンと同様に『ナジャ』の物語の進行に伴ってそのいくつかの場所を見直してみたくなる程である。当初我々はその場所になんかの意味があたかも解くべき謎のように隠されているのではないかと考え、地図上においてその場所ごとに印を付け意味ある場所を発見しようと努めたことがあった。それについては未だ解決の糸口さえ見出せず、結局のところそこには謎自体存在しないのではないと思われるが、少なくともこの論考においては言及する必要性は感じていない。何故街中を行き来するのかについて、ブルトン自身自覚的ではありながらも、明確な答えを見出せないでいる。例えば『ナジャ』においてナジャの物語の始まる前のシュルレアリスムの体験を物語る挿話の部分において次のように書いているのだ。「人は、さしあたり、パリで私に出会うこと、午後の終わり頃、ボンヌ-ヌヴェル大通りの『マタン』誌の印刷所とストラスブール大通りの間で、私が行ったり来たりしているのを見かけずに三日以上過ぎることはないというのは確信できる。私には何故だか知らないが、私の歩みが私を向かわせ、私がほとんどいつも決まった目的もなしに赴くのが、実際のところそこなのだ、この漠然とした資料、つまりそれ(?)(下線原文)が起こるであろうというのがそこなのだという決定的なものが何もないのにだ。私には、この素早い道のりにおいて、私の知らないうちにでさえ、空間的にも時間的にも、引力の極を構成し得るであろうものが何か、ほとんどわからないのだ。」(PI p.661, p.663)

ここにおいて「それ」とは恐らくボンヌ-ヌヴェル大通りのあたりを行き来していれば理想の

女性に出会うことがあるのではないかということだと推測できるが、だからといってこのボンヌヌヴェル大通りが目的の場所になっているわけでも、そこで出会うはずの女性が目的の女性というわけでもないのだ。確かに理想の女性を求めているわけだが、目的はむしろその女性から靈感を得るためだと言えるだろう。そもそも女性よりも場所というのは、例えば日付は明記されていないが、10月13日と考えられるブルトンとナジャがサン＝ジェルマンに赴いた時のこと、ナジャの指摘によればそこには知っておく必要のある場所が存在するということなのだ。具体的には次のように書かれている。「そこ、城の上の右側の塔の中に、恐らく、我々を訪れさせようとは思わないだろうし、我々も恐らく間違って訪れることになる——それを試みる理由がほとんどない——しかし、ナジャによれば、例えば、サン＝ジェルマンで我々が知っておく必要があることになる全てである部屋があるのだ。」(PI p.716)

確かにブルトン自身注で記しているようにこの城は歴史的にも意味のあるものであって、知らなくていいというわけでもないのだが、むしろブルトンが注目したのはそこには様々な謎が隠されていて、その謎を解くことが「精神の最大の冒険」(PI p.716)だということなのである。そしてそれはわざわざサン＝ジェルマンにまで出かけて行ったからこそ得られるというものでもなくて、パリという街中であって可能になることなのである。ブルトンはナジャとの出会いを重ねた後、ナジャとは一体誰であったのかという思いを巡らせるわけであるが、その中に次のような記述がある。「彼女にとって唯一の価値ある経験の場である通りで、偉大なキマイラに投げかけられた全ての人間の疑問の届く所である通りにいることしか好きではなかった常に靈感を受けかつ靈感を与える女性」(PI p.716)ということである。これはナジャについてのものであるが、それをそのままブルトンに置き換えてみればわかりやすいだろう。本当のナジャとは誰かという問いかけに対する答えの中には、これとは別に「身を持ち崩していた(下線原文)」(PI p.716)ナジャという捉え方もされているわけなのだが、ブルトンにしてみればそのようなナジャとはあまり関わりたくない存在なのである。

このように考えるならば、ブルトンがパリという街の中をあたかもさまようが如く行き来していることの意味が明らかになってくるだろう。そしてこのことはまさに我々が序章において指摘したように、ジェイムス・ジョイスの『ユリシーズ』における主人公ブルームの姿を連想させるのである。つまりブルームはダブリンの街を日常生活の意味を求めてさまようのである。確かに『ユリシーズ』の中には『ナジャ』におけるようにシュルレアリスムの観点というものは存在しないが、主人公が意味を求めて街中をさまようという点については同様である。また靈感を与えられるというのが主人公が出会う女性からというのも同様である。これについてデクラン・カイバードは『ユリシーズ』を書くにあたってジョイスが下敷きにしたダンテの『神曲』との類似性も指摘している。つまりダンテの『神曲』においてはベアトリーチェ・ポルティナーリであり、『ユリシーズ』においてはノラ・バーナクルからそれぞれ主人公は靈感を得ているということなのである。またその女性との出会いも街中で出会ったという点でも類似している。つまりこれらの女性たちは恋愛の対象というよりは、作者たちに作品のヒントをもたらすべく送られてきた存在ということなのである。

このように考えるならば、ブルトンがナジャと初めて出会った10月4日の記述で、ナジャ

と出会う直前の心情として「全く暇で非常に消沈した最近の午後」(PI p.683)という表現が使われていることも理解できるだろう。つまり当時のブルトンにとってシモーヌと結婚してはいたものの、愛人であるリーズ・メイエルとの関係にも悩まされていて、またシュルレアリスム運動におけるメンバーの脱退の問題、更には政治的な問題の解決を迫られるといったようなことが続き、順風満帆といった状態ではなかったことも確かなのである。そういった中でのナジャの出現であって、自動記述についても行き詰まりの状態にあったため、シュルレアリスムの打開という意味からも必要であったと思われる。ナジャがブルトンにとって理想の女性であったかどうかというよりも、むしろナジャはブルトンに『ナジャ』を書かしめるべく現われたのだと解することができるのである。それは『ナジャ』のテキストの中においても、ナジャの言葉として次のように表現されている。「アンドレ？ アンドレ？… あんたは私について小説を書いてね。私はあんたに請け合うわ。駄目だと言わないで。気をつけてね、全ては弱くなり、全ては消えるの。私たちの中で何かが残らなければならないの…」(PI pp.707-708)

ナジャはナジャ自身の言葉によれば、マリー・アントワネットの時代に彼女の側近の一人であったということだし、あたかも幽体離脱でもしているかのような存在で、例えば「それは彼女がお風呂に入っている時の朝のようで彼女の身体は彼女が水の表面をじっと見つめているのに離れているようなのだ。〈私は鏡のない部屋の中で浴槽の上の思考なのです〉。」(PI p.708)と証言している。いささかオカルト的だが、ブルトンはナジャを通してシュルレアリスムについての思いを深めることができたのである。そしてナジャを見失って、ブルトンはまたパリという街に戻り、それを見直すことを始めるのであるが、「今回の場合、いくつかの例外を除いてそれらは私の企てに対して多かれ少なかれ抵抗していたということを私は確認した」(PI p.746)。

こうなるとブルトンとしては書き進めることができないのであるが、シュザンヌ・ミュザールと過ごした南フランスのアヴィニョンについてはあるいは書くことが出来るかもしれない。しかしそれは作品の形として結実されないのであって、ブルトン自身「私はこの心的風景を下書きの状態にしておく、その境界線は私を落胆させるのだ」(PI p.749)と書いている。確かに現実の存在であるパリという街も変化しているのであり、ブルトン自身も変化しているわけだろう。このような出会いが単に物理的なものではなく、シュルレアリスムという芸術上の意味合いとして起こったのだと考えるなら、舞台設定をパリとするだけでは充分ではなくて、1926年の10月のパリと設定されていることに意味があるのだと理解されなければならないだろう。

注

1) 引用文の後もしくは文中の括弧の中に示されている略記号は以下の文献を示している。尚、引用文については全て筆者が訳したものである。通常原文においてイタリック体で書かれているものについては下線を付し、それが原文におけるものであることを示すために(下線原文)と但し書きを付け加えているのであるが、今回の論考においては問題となっている動詞の存在を明らかにするために但し書きをつけずに下線を付している。また動詞の存在を明らかにするために意図して直訳風に訳した場合がある。直訳風にしてもその動詞を明らかにすることが困難である場合は、原文を示し該当する動詞に下線を付すこととした。

- (PI)André BRETON, *Œuvres complètes I*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1988
Nadja, 1928, pp.643-753
- (PIV)André BRETON, *Œuvres complètes IV*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 2008
Du surréalisme en ses œuvres vives, 1962, pp.17-25
- (SXX)Jacques LACAN, *Le Séminaire Livre XX, Encore 1972-1973*, Seuil, 1975
texte établi par Jacques- Alain MILLER
- (EN)Jean-Paul SARTRE, *L'être et le néant*, Gallimard, 1943
- 2)Declan KIBERD, *Ulysses and Us: The art of everyday living*, Faber and Faber Ltd, 2009